

気鋭の服飾史家ふたりが奥深き英国伊達男の世界に迫る

〈特別対談〉 「カントリー・ジェントルマン」とは いったい何者だったのか？

緑多きカントリーサイドで、ハンティングやフィッシングを愉しむ紳士……。今、われわれが思う「カントリー・ジェントルマン」には、そんな漠然とした優雅なイメージしかないだろう。しかし、そもそも彼らは何者であり、彼らの着る洋服はどのようにして、一大ファッションキーワードになったのか……。そこで今話題のふたりの服飾史家による特別対談を開催。イギリスとフランス。貴族文化の色濃い2国の歴史をふまえながら、その真実をひもとこう。

16世紀、有閑階級のイギリス貴族が 「カントリー・ジェントルマン」のルーツ

——日本におけるカントリー・ジェントルマンといえば、真っ先に白洲次郎が思い浮かびます。

中野 普段は田園で農業をしているけれど、目は常に中央に向けていて、いざ何かあれば馳せ参じます、というクールなイメージですね。だから日本では地方の名士がカントリー・ジェントルマンを自負することも多い。でも、そもそものイメージとはずれています。19世紀初頭にはポー・ブランメルも「ブーツから馬糞のにおいがする。カントリー・ジェントルマンのにおいがする」と侮蔑するような言葉を放ったそうです。

鈴木 「草の上に座っているから、ズボンが緑になる」だなんて揶揄されたりもする。当時は街に暮らすジェントルマンと対比して、田舎ものと呼ばれたんです。

——では元来カントリー・ジェントルマンとはどんな人間で、どんな暮らしをしていたのでしょうか？

中野 16世紀、テューダー朝の頃に登場した、マナーハウス、カントリーハウスと呼ばれる大邸宅に暮らし、領地の土地収入で有閑生活を送っていたイギリスの、



© by Anwar Hussein/Getty Images



© Photo by Topical Press Agency/Hulton Archive/Getty Images

若きチャールズ皇太子。チェックのツイードジャケットにハンティング帽というスポーティな装いだが、タイドアップは欠かさない。「カントリー・ジェントルマン」の不文律だ。

「カントリー・ジェントルマン」として著名だった第4代ウェリントン公爵の、1930年の写真。その装いが貴族としてはかなり質素であることは、モノクロ写真でも伝わってくる。

中野香織

服飾史家・エッセイスト

東京大学大学院を修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆家となる。「モードとエロスと資本」(集英社新書)など多数の著書あり。2008年より、明治大学特任教授も務める。

WHAT IS COUNTRY GENTLEMAN?

鈴木文彦

服飾史家・翻訳家

早稲田大学第一文学部仏文学科、一橋大学言語社会研究科などを経て渡仏。パリ第四ソルボンヌ大学にてフランスのダンディズム等の研究を行う。現在さまざまな媒体で活躍する、気鋭の若手服飾史家。

機能のみに徹したデザインが カントリーウェアの醍醐味

——カントリー・ジェントルマンがファッションに無頓着だったというのは意外な話です。彼らの衣服にはどのような特徴があったのでしょうか？

中野 ハンティングやフィッシングなど、スポーツで着る衣服ですから、丈夫さや動きやすさといった機能を最優先させた服です。ただ、ストレッチが利いた服では決してない。当時のスポーツは紳士階級の気晴らしですから、本気がいってダメ。どこか余裕がなくてエレガントではないとされていたんです。これを「プラクティカル・エレガンス(機能的優雅)」と言います。紳士階級はアマチュアリズムをよしとし、プロフェッショナルリズムを嫌いました。そのあたりの思想は、映画『炎のランナー』にも描かれています。

貴族ですね。20世紀前半には没落しましたが、マナーハウスというのは、邸宅であり、社交場であり、時には裁判所にもなりました。地方行政所のような役目をするところもあったんですよ。屋敷には大勢の使用人がいて、幾重もの階級がありました。

鈴木 いかにもイギリスらしい文化ですね。
中野 余談ですが、エリザベス1世（1558年即位）なりヘンリー8世（1509年即位）なり国王は、度々そこへ出向き貴族に接待させ、散財させたんですね。江戸時代の参勤交代のような（貴族は国王に忠誠を示し良好な関係を保つ。国王は散財させることで力を抑制する）目的も、マナーハウスにはありませんが、鈴木 フランスにも中世の城は多く残っています、あくまでも軍事要塞の名残。城のまわりには街があり、そのまた周辺に田園が広がっています。その点イギリスのマナーハウスは、緑一面の景色のなかにポツン、と建っている贅沢なイメージがあります。

中野 ポツンとさせたのは、周囲の人間に羨ましがらせるのも目的だったからでしょう。そこですごい労力をかけて庭園や田園、川までも敷地内につくった。しかも完璧なランドスケープを目ざすために、目ざわりの集落は丸ごと移動させたんです。イギリスには（似たような建物が並んだ）おもちゃみたいな風景のヴィレッジがありますよね。あれは目ざわりだったからまとめて村民を移住させ、つくった村の名残です。

——— すごい暮らしぶりが想像されますね。すると領主は身だしなみにも、相当心血を注いでいたのでは？

中野 いえ、これが逆にこだわらなかつた、というよりこだわらなかつたんです。領主様は何を着ていても領主様ですから、毎日同じボロを着ていても構わなかつたわけです。そして、そこに逆説的な憧れが生まれたのでしょう。ただ、カントリーにいるときはその景色に溶け込むものを、街へ出向くときはその街並みに溶け込むものと、彼らはしっかり着分けた。イギリス人は場違いであることを嫌いますから。先ほど都会のジェントルマンにカントリー・ジェントルマンが嫌われたと話しましたが、田舎の装いをそのまま都会に持ち込んだ人間は野暮



© Photo by Sean Sexton/Hulton Archive/Getty Images



© Photo by Hulton Archive/Getty Images



© Photo by Keystone/Getty Images

1905年に撮影された「カントリー・ジェントルマン」の肖像写真（人物不詳）。狩猟時の装いだが、たとえ遊興であってもジャケットにジレ、そしてウイングカラーのシャツをしっかり着用しているあたりに、上層階級の余裕を感じる。

第2代ウェストミンスター公爵の隣にいるのはココ・シャネル。*シャネルの名声を不動のものとした『シャネルツイード』は、公爵のカントリーライフにインスピレーションを得て生まれたと言われる。こちらは1925年の写真。

ゴルフ好きで知られた後のウィンザー公が国賓として来日した際、当時摂政であられた昭和天皇と撮影された一枚。ツイードジャケットにニッカーボッカーズ、キャスケット帽という装いはまさに、カントリースタイルの代表例だ。

——— ではそんな彼らの装いがファッションとして確立される背景にはどんなものがあったのでしょうか？

鈴木 フランスでは18世紀末の市民革命によって貴族のファッションが途切れるんですね。市民階級の衣服であった長ズボンをはいたサン・キュロット派によって、ブリーチズ（半ズボンの一種。タイトなホーズと合わせた）をはいていた宮廷人は皆、殺されてしまいました。従来は貴族の装いが殺しの対象になったのです。そこで、何か代わるものはないかと輸入したのが、イギリスのカントリー・ジェントルマンの乗馬服だった。当時、イギリスの服は縫製などのクオリティも高く、フランスは到底及びませんでした。それも乗馬服がエレガントなものに映った一因かもしれませんね。

中野 スーツの源流も乗馬服と考えられます。たとえばカントリーフロックと呼ばれるコートは、雨風に對する工夫として襟が付いていました。この襟と、リラックスする際にフロントボタンを外して折り返した部分が、スーツというカラーとラベルの原型になったと。ラベルは軍服由来という説もありますけどね。余談ですがココ・シャネルの『シャネルツイード』も、大金持ちの愛人ウエストミンスター公爵のカントリーライフにインスピレーションを得て生まれたとか。

——— おふたりはカントリー・ジェントルマンの装いのどこにファッションとしての魅力があると思いますか？

中野 ファッションの世界ではミリタリーなど、本来の姿とは違うところに魅力が見出され、人気が出る場合がありますよね。当時は決して格好のいいものではなかつたカントリー・ジェントルマンの装いにも、同様の作用が働いたのだと思います。彼らの服はハンティングやフィッシングなどの運動をするための機能に徹していて、なんの格好よさもアピールしない服。そこに人々は逆説的に、「男の服はかくあるべき」という共感を覚えたのでしょう。

鈴木 同感です。何者にも媚びていない裸のような状態が、結局はいちばん格好いいんですよ。

——— 「格好よさ」だけを求めたファッションが世にあふれる今だからこそ、そんなカントリー・ジェントルマンの美意識が新鮮に映るのかもしれないですね。